

じんけん

JINKEN
第171号
(通巻 298号)
2026年9月28日発行

INDEX

特集

第48回大分県人権・部落差別解消教育研究大会ならびに第11回大分県人権・部落差別解消保育研究集会
ヒューライツフォーラム2026 2

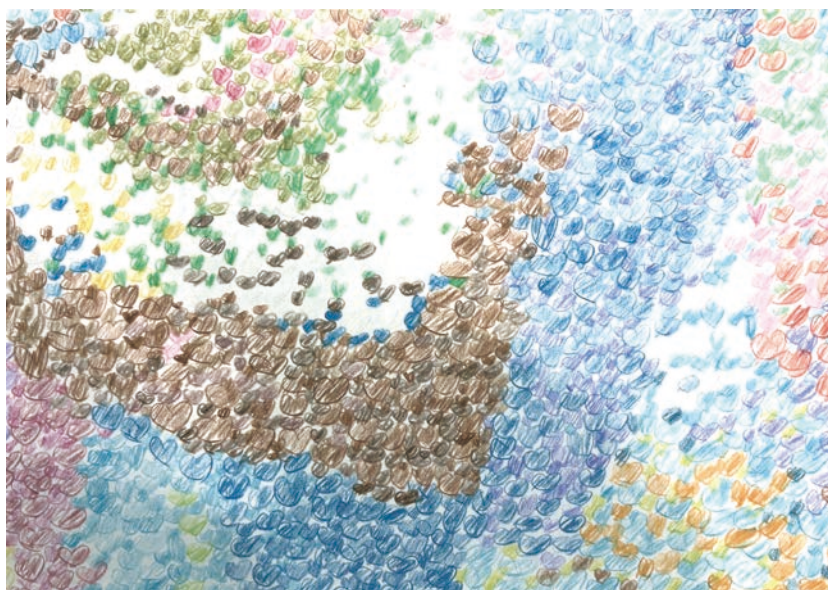
県人教事業より 6
オープン講座 (第1回/第2・3回)

県人教事業より 8
オープン講座 (第4・5回)

県人教専門委員より 9
背筋を「ヒヤリ」とさせる

県人教専門委員より 10
標準服型制服の導入から見てきたこと
～差別を見抜き、差別を許さない学校づくりのために～

こどものまなざし 12
なかよしになってうれしいよ
豊後大野市 恵藤 遥さん



公益社団法人

大分県人権・部落差別解消教育研究協議会

大分県大分市大字下郡496-38 大分県教育会館内
TEL: 097-556-1012 FAX: 097-556-0864

URL <https://kjkoiita.jp/wordpress/>
E-mail hello@kjkoiita.jp



大分県人教の
ホームページは
こちら

印刷 小野高速印刷(株)

第48回大分県人権・部落差別解消教育研究大会ならびに
第11回大分県人権・部落差別解消保育研究集会

ヒューライツフォーラム2026 開催のご案内 (最終案内)

公益社団法人大分県人権・部落差別解消教育研究協議会は、2004年以降県内に広く人権文化を根づかせていくため、各地持ちまわり、輪番制で、ヒューライツフォーラムとして発信していくこととしました。本年度は大分市・由布市での開催となります。ヒューライツフォーラムでは県内各地の学校や地域での人権確立をめざした実践について学び、一人ひとりが自らの実践を振り返る機会をもつことで、人権意識の向上や人権のまちづくりを進めています。

また、2016年に「フォーラム人権のまちづくり」が、2018年に「大分県人権・部落差別解消保育研究集会」がそれぞれヒューライツフォーラムに合併し、複数の大会・集会を統合して開催することになりました。このことにより、部落差別をはじめとするあらゆる差別の解消に向けてより多くのなかまと共有していけるように、乳幼児期から学校教育・社会教育に至るまでの進路・学力保障の取り組みを通して、実践から学び合える場づくりを保障しています。

大会テーマ

差別の現実から深く学び、生活を高め、
未来を保障する教育を確立しよう

地元テーマ

誰もが幸せになれる未来を創る これまでも そして これからも
～あなたもわたしも 大切にされるまち おおいた～

と き

2026年10月23日(金)・24日(土)

と こ ろ

(全体会) J:COM ホルトホール大分

大分市金池南一丁目5番1号

(分散会) 大分市内中学校・高校、はさま未来館大研修室の14会場

資 料 代

3,500円

大会日程

9:00		12:00		13:00		14:20		16:00	
23日 (金)	準備 リハーサル			受付	開 会 行 事	基 調	ヒ ュ ー ラ イ ツ ス テ ー ジ	記念講演	16:20 前日打合せ
									集計 片付け
	ヒューライツミュージアム								

9:00		9:30		10:00		12:00		13:00		15:00	
24日 (土)	準備	受付	分 散 会 実践報告			昼食 休憩	分 散 会 実践報告			片付け	

開会行事(予定)

- 1 開会のことば
- 2 主催者あいさつ(県人教)
- 3 共催者あいさつ(大分市)
- 4 実行委員長あいさつ
- 5 来ひん代表あいさつ
- 6 来ひん紹介
- 7 理事・監事紹介
- 8 閉会のことば

ヒューライツミュージアム

地元の取り組みを展示

ヒューライツステージ

大分県立大分西高校 演劇部

記念講演

【演目】 へ こ た れ へ ん ～人はきつとつながれる～

【講師】 松村 智広 さん（みえ人権教育・啓発研究会 代表）

1957年三重県伊賀市に生まれる。1981年三重県伊賀市立中学校教員となる。その後、三重県人権センター調査研究員、(公財)反差別・人権研究所みえ（ヒューリアみえ）主任研究員、三重県教育委員会人権教育課長、伊賀市立大山田中学校長を務め、2018年に定年退職。2021年までライトピアおおやまだ（伊賀市隣保館）館長。現在、みえ人権教育・啓発研究会代表。

この間、大阪教育大学大学院へ同和教育で内地留学（森 実先生に師事）し、大阪教育大学講義内講師、三重県同和教育問題啓発講師団講師、三重県生涯学習講師団講師、四国学院大学非常勤講師、部落解放・人権大学講師、三重県人権大学講師、三重県人権教育教材作成委員、いじめ問題相談員などを歴任した。

著書に、『『同和』教育する人、この本と一まれ！』、『明日かがやく』（共著）、「あした元気になあれ」「続・あした元気になあれ」「だまってられへん」「へこたれへん」がある。そのほか、雑誌「部落解放」や「ヒューマンライツ」（解放出版社）、「解放教育」（明治図書）等に論文を多数投稿してきた。

また、三重県制作・同和教育問題啓発映画「谷間に吹く風」、「同和教育の解決のために」、日本テレビ系列「ドキュメント99『架からぬ橋』～部落差別は今～」、メディア総合研究所制作ビデオ「あした元気になあれ」、「主語で語る人権教育」などに出演し、全国人権・同和教育研究大会では、全体会地元特別報告や特別分科会講演を務めてきた。

その他

(1) 「駐車場」について

- 1日め全体会参加者につきましては、駐車場の駐車券をお渡ししません。周辺の駐車場もしくは公共交通機関のご利用をお願いします。
- 2日めの分散会につきましては、会場ごと駐車場を準備しているため、駐車券は発券しません。
- 参加会場ごとの駐車場については、各地区研究会の代表者にお伝えします。

(2) 「受付」について（事前申込）

- 大会1日めは、A票 全体会／大会資料引換券を提出してください。
- 大会2日めは、B票を提出してください。
- 両日とも、事前に参加券に必要事項を記入して、提出をお願いします。
- 当日参加の方は、当日参加専用の受付で手続きください。
- 車椅子利用の方の席を準備しております。受付でお声をかけてください。

◆主催 公益社団法人分県人権・部落差別解消教育研究協議会
大分県人権・部落差別解消保育連絡協議会

◆共催 大分市 大分市教育委員会 HF2026実行委員会

◆後援 朝日新聞大分総局 / 一般財団法人大分県教育会館 / 一般財団法人大分県私学協会 / 一般社団法人分県身体障害者福祉協会 / NHK大分放送局 / 大分県 / 大分県教育委員会 / 大分県教職員組合 / 大分県高等学校教職員組合 / 大分県高等学校PTA連合会 / 大分県公立高等学校教職員組合 / 大分県国公立幼稚園・こども園会 / 大分県市長会 / 大分県市町村教育長協議会 / 大分県児童養護施設協議会 / 大分県小学校長会 / 大分県商工会議所連合会 / 大分県商工会連合会 / 大分県中学校長会 / 大分県町村会 / 大分県農業協同組合中央会 / 大分県PTA連合会 / 大分県保育連合会 / 大分県立学校長協会 / 大分県隣保館連絡協議会 / 大分合同新聞社 / OAB大分朝日放送 / OBS大分放送 / 学校法人平松学園大分短期大学 / 学校法人溝部学園別府溝部学園短期大学 / 株式会社エフエム大分 / 公立大学法人大分県立芸術文化短期大学 / 国立大学法人大分大学 / 社会福祉法人大分県社会福祉協議会 / 社会福祉法人大分県聴覚障害者協会 / 社会福祉法人大分県盲人協会 / TOSテレビ大分 / 同和教育問題に取り組む大分宗教者教団連絡協議会 / 大分工業高等専門学校 / 西日本新聞社 / 日本文理大学 / 東九州短期大学 / 部落解放共闘大分県民会議 / 部落解放同盟大分県連合会 / 別府大学・別府大学短期大学部 / 毎日新聞社 / 読売新聞西部本社 / 立命館アジア太平洋大学

※五十音順に紹介（全48団体後援予定）

HF2026 分科会分散会一覧表

分科会 区分	分散会 番号	報 告 者	報 告 内 容	会場施設
1 乳幼児期	1	大分（義務制） 小松 真子 宗方幼稚園	「おはよう」 ～いとさんとかかわりから学んだこと～ 入園当初より表情がかたく、改まった場面での表現に難しさを抱えていたいとさん。園全体で同じ思いでかかわってきた。いとさんとかかわりを通して、幼児教育はすべて人権教育につながっていると改めて痛感した実践の報告。	植田西中学校
		森山 資典 熊本県人権教育 研究協議会会長	演題『「乳幼児期からの人権のまちづくり」～孤獨育てからなかま育てに～』にて講演。	
2 教育の創造	2	中津（義務制） 後田 大貴 大幡小学校	安心できる居場所づくりをめざして 教室にはいることが難しかったAさんに、悩みながら本人の安心感を大切に支援を続けた。学校全体や保護者との連携による居場所づくりを通して見られたAさんの成長と、自分自身の学びについて報告する。	明野中学校
		大分（義務制） 久野 基行・大野 舞 大分市教育センター ／佐賀関中学校	「卒業まで、その先も、この5人となかまでいたい」 入学当初、なかまのことを知ったつもりになっていて、何事にも無関心だった6人。お互いのことを知ろうとし、自分も相手も大切にするためには、どうしたらよいのかについて考え、取り組んだ実践報告。	
	3	速見（義務制） 高瀬 祐子 豊岡小学校	「俺の気持ちなんか、誰にもわかるわけがねえ」 教室を飛び出し、校舎内を逃げ回るA。「俺の気持ちなんか、誰にもわかるわけがねえ」と叫ぶAへの対応を模索する日々。Aのきつさや困りを受けとめ、Aが心穏やかに過ごせる環境づくりに取り組んだ実践。	判田中学校
		津久見（義務制） 薬師寺 卓 保戸島中学校	「変える」のではなく「寄り添う」へ 極小規模特認校での取り組み 「いつも自分のせいにされる」と感じていた生徒との関わりを通して、その思いに寄り添いながら自己表現と仲間づくりを支えた実践である。安心して思いを語る関係づくりの重要性についての報告。	
	4	豊後高田（義務制） 山崎 裕子 田染小学校	子どもが安心して登校できる環境づくりをめざして 学校に行きづらくなったAさんに対し、安心できる環境づくりや得意な教科から学びに参加できる支援を行った。一人ひとりの思いや個性を尊重した関わりを通して、登校意欲や自分の思いを伝える力の変容について報告する。	植田南中学校
		玖珠（義務制） 安部 魁斗 くす星翔中学校	クラスのなかま全員が過ごしやすいクラスに 中学校に入学し、いろいろな小学校から来たメンバーで過ごす中で、生徒同士の関わり方に着目した実践である。くす星翔中学校での独自の取り組みであるクラスの人権宣言を考える際の出来事や日々の積み重ねを記している。	
	5	日田（義務制） 山村 直子 大明小学校	「先生、今は言わない方がいいよ」 配慮を必要とする児童Aさんに対する、日常や運動会の練習の取り組みの中で、Aさんに対する自分の意識を見つめ直し、子どもたちどうしの関わりを尊重していくことで、Aさんの周りの子たちの思いや、その変容にも気づくことができた実践。	原川中学校
		久大地区（高校） 糸永 伸哉 日田林工高校	「進撃の人権学習」～人権通信と外部講師を活用した、人権意識と自尊感情向上の取り組み～ 日田林工高校での、漫画「進撃の巨人」や各種外部講師との対話を活用した人権学習の実践報告。生徒の興味に寄り添うカリキュラム再編や通信発行により、9割以上の生徒が学びを実感し、日常の意識変容に繋がる成果を得た。	
3 自主活動・なかまづくり	6	宇佐（義務制） 岡本 徳子 北馬城小学校	「挑戦することができましたか…自分自身に◎」～子どもの言動の向こう側に思いを馳せる～ 上手くいかないとなげやりになり、自分を認められないでいたAさん。学級活動・児童会活動を通して友だちとつながり合い、安心して過ごせるようになったことをきっかけに、自分を認められるようになった実践の報告。	大東中学校
		臼杵（義務制） 諸富 裕美 下南小学校	「みんなに言われたこと、うれしかったです」～安心してすごせる学級づくりをめざして～ 「みんなに言われたこと、うれしかったです。」たった一言だけれど、Aさんの照れた笑顔は印象的だった。学級の中で威圧的な態度をとり、すぐに暴力をふるう。そんなAさんと周りの子どもたちの関わり方を見つめました。	
	7	佐伯（義務制） 森 文香 渡町台小学校	「先生、今ならお話できそう」～『思い込み』から『寄り添い』へ～ 言葉で伝えることが苦手な支援学級の2年生A。Aの行動の背景にある思いを教師や子どもたちが考え続ける中で、Aへの見方がこわい存在から『大切な仲間』へと変容し、A自身の生きづらさも改善に向かい始めた実践。	植田東中学校
		竹田（義務制） 後藤 絵里 竹田小学校	『竹田小学校にも人権宣言が欲しい！』～一人ひとりが自分らしく輝ける学校創り～ みんなが主役、全校で輝きたいと児童会活動にとりくんでいた子どもたち。他校に「人権宣言」があることを知り、自分たちの学校でもみんなで大切にしたい約束を、想いを重ね合いながらつなぎ合わせ創り上げていった報告。	
	8	豊後大野（義務制） 山田 真 朝地小学校	一人ひとりが大切にされる学級をめざして 入学時より単学級であるため、学級集団における人間関係の固定化、思いはあるのに表現できない子どもたちがいる。学級一人ひとりが互いのよさを認め合い、自他を尊重できる集団をめざして取り組んだ日々の実践報告。	大分上野丘高校
		別府地区（高校） 古田 裕也 別府翔青高校	担任1年目のまとめ ～対話、支援、そして2年目～ 新米担任が直面した生徒支援の現実とクラスの課題。これらの「困り」を構造的に捉え直し、担任と生徒が一体となって課題解決に取り組み、互いを尊重しあえる温かいクラスを構築していく過程を報告。	

分科会 区分	分散会 番号	報 告 者	報 告 内 容	会場施設
4 進路・学力保障	9	くにさき（義務制） 滝口 敦子 富来小学校	小さなサインに気づきその子の困りに寄り添いたい こだわりが強く周囲から浮いていたまことさんの困り感に寄り添い、心情をクラスに共有しました。その結果、周囲の応援や誘い合いが生まれ、関係性が改善し、学習や生活へ意欲的に取り組む姿へと変容しました。	大分工業高校
		大分地区（高校） 大石 恵子 大分工業高校定時制	少人数教育の強みを生かした生徒支援の取り組み 定時制高校に求められるニーズは従来と比べて変化しており、生徒の実態も大きく変容している。このような状況を踏まえ、生徒の実態に即した支援の在り方を模索した取り組みについて報告する。	
	10	杵築（義務制） 荒金 良作 山香中学校	学習支援を必要としている生徒への寄り添い方 Aさんは自分の気持ちを表現することが苦手で口数も少ない。学習に向かう姿勢も消極的で、1年次はいつも課題に追われ、やらされる学習が続いていた。この状況を変えたいと考え、Aさんの気持ちをゆっくりと聞き、どんな困り感をもっており、どう寄り添えばいいのかを学年で相談し実践した。	東陽中学校
		別府（義務制） 小谷 洋介 南小学校	Aさんの困りを通して私が学んだこと ～自分ですることの大切さに気づいたAさんの姿から～ 二分育権のAさんは、宿泊学習や日々の活動を通して「自分でできること」を増やし、少しずつ自信と主体性を育てていく。Aさんの成長のためにめざす姿は何か、教員としてどうかわるべきか、悩みながら取り組んだ実践。	
	11	宇高地区（高校） 田野崎 俊太 宇佐高校	初めて担任をして 「できないのは本人の甘え」という偏見を持っていたが、無気力な生徒との関わりを通して背景や自己肯定感の低さを理解した。寄り添い支援する伴走型指導へ転換し、生徒理解と心理的安全性を重視する学級経営を目指すようになった。	大分雄城台高校
		豊肥地区（高校） 渡邊 晴也 稲葉学園高校	多様な背景を持つ生徒への学習支援 ～単位制クラスにおける学習保障の実践～ 昨年度、多様な背景から転校・転籍してきた生徒が集まる単位制クラスの担任を務めました。本レポートでは、生徒一人ひとりの事情に寄り添い、安心できる居場所と学びを届ける「本校ならではの」支援や学力保障の取り組みについて報告します。	
	12	中津地区（高校） 山香 康 中津北高校	「進路希望はない。私の目標は高校を卒業すること」 ～ Aとの出会いを通して、「進路保障」を考える～ Aは卒業年次の私のクラスの生徒だ。このレポートはAが自身の卒業・進路決定に伴い保護者や自分と向き合った記録であり、現在のAの思いを基に私自身の取り組みを振り返る報告である。	大分豊府高校
		県南地区（高校） 甲斐 崇浩 佐伯豊南高校	周囲の理解とサポートの力 ～Aさんとの関りを通して～ 中学時代は通級教室で過ごしていた自閉症スペクトラム障害の生徒が、祖母の願いを受け全日制高校へ進学。心身の大きな負担に直面しながらも、学校側の配慮やサポートに支えられ、高校を卒業した軌跡。	
5 学習・啓発・まちづくり	13	国速杵地区（高校） 高橋 直孝 杵築高校	性の多様性についての取り組み 一制服検討委員会とLGBTQ－ 人口の5～7％程度がLGBTQなどの性的マイノリティであると言われていますが、社会や学校での対応は遅れています。性的マイノリティの生徒たちの悩みの解決に向けての取り組みの一部を紹介します。	はさま未来館 大研修室
		由布（義務制） 永松 千春・杉本 恭子 挾間中学校	「自分を生きる」を支える学びの5年間の軌跡 ～段階的・教科横断的「HASAMAモデル」の形成～ 標準服導入の背景にここまでの教育実践があった。ある生徒との出会いから性の多様性を構造の問題として捉え、研修・授業・対話を積み重ねた学校文化変容のプロセスと実践の過程で生まれたHASAMAモデルを共に考える。	
	14	佐伯（社会教育） 清水 昌和 佐伯市じんけん「協働」 ネットワーク会議 大分（社会教育） 羽田野 真代 大分市教育委員会 社会教育課	「自分を語る会」の取り組み ～HF佐伯大会からつながる「人権のまちづくり」への参画～ 昨年度行ったHF佐伯大会の成果と課題を整理し、佐伯市じんけん「協働」ネットワーク会議の方向性を考え、取り組んでいる実践。その中で、「自分を語る会」の継承を受け継いできた実践。 大分市教育委員会 社会教育課の人権フェスティバルの取組について 大分市では、あらゆる差別の解消を図る意欲と実践力をもった市民の育成を目的に、年間を通じておおい人権フェスティバルを開催している。中心市街地等での啓発活動や人権講演会、人権作品コンクール等の取組について報告する。	城東中学校

★会場利用について

- ・常時換気等を心がけていますので、温度の変化に対応できる服装でご来場ください。
- ・各施設には、主催者よりスリッパ等の貸出を取りやめていただいています。**13分散会以外は、上履きをご持参ください。**
- ・分散会会場の近くにお店が少ない場合もありますので、事前に昼食の準備をお願いします。会場での弁当の販売も行いません。

★分散会会場について

- ・分散会会場間の移動は認めていません。事前に申し込まれた分科会での学びの場づくりにご協力ください。
- ・靴や傘等は、ビニール袋を準備しますので、各自で保持してご参加ください。
- ・子どもたちの学びの場や市民の集いの場を会場としてお借りしていますので、ゴミは各自でお持ち帰りください。
- ・片付けにもご協力いただけますと幸いです。

【お問い合わせ先】

公益社団法人 大分県人権・部落差別解消教育研究協議会

《住所》〒870-0951 大分市下郡496-38 大分県教育会館2階 《電話》097-556-1012

7月2日（木）

第1回オープン講座

花岡 清蔵さん

つくられた部落差別をなくすために ～部落問題学習の授業を考える～

花岡さんは、「人はなぜ差別をするのでしょうか」の質問から、よくある質問や意見として「部落差別はなくなるのか」「部落差別は教えなければ、だれも知らなくなり、なくなるのではないですか、あえて教えなくてもよいのではないのでしょうか？」と話し、部落問題学習をする意味としてある特定の人たち（人種、民族、障がいや病気、職業、祖先の出自、性別などの理由）を排除することで、自分たちが生活する社会の安心と安定を求める考え方が私たちに身についてしまっている。それは日本の歴史の中で、私たちに植え付けられた感覚、考えである。そこには部落差別が大きく影響している。だれもがともに生きる社会を実現するためには、部落差別をなくすことが必要であると続けた。

また、「解放令」から同対審答申の流れや部落問題学習の視点について話し、中学校教科書の記述からも言及しました。最後に延岡市であった差別事件の保護者の思いにもふれ、参加者皆で共有した。

参加者の感想の一部を紹介すると、

- ・実際の体験に基づく内容で、説得力があった。
- ・差別の現状や差別がなくなる理由についてもよくわかった。
- ・みんなが大切、学ぶことが大切だと改めて感じた。
- ・教科書の記述の話や延岡市で起きた事例などとても心に残った。
- ・差別は差別する人の問題であり、社会の問題であり、私たち1人ひとりの課題。
- ・事例の話を聴いて、とても悲しくなった。このような思いをすることもたちがいなくなるように大人が務めていかないといけないと強く思った。
- ・「差別をされた人たち」ではなく、「差別と闘った人たち」という表現は、力強く素晴らしいと思った。部落差別という理不尽な差別がなくなるように、これからも学習を続けていきたい。

7月28日（火）

第2回オープン講座

おおいたCAP

こどもへの暴力防止プログラム CAPプログラム大人ワーク

CAPスペシャリストの仲村さん、木村さんにCAPプログラムについての歴史やこどもの権利について講話と模擬ワークを実施した。

CAPプログラムとは、Child（こども）への Assault（暴力） Prevention（防止）教育の意味で、こどもたちがあらゆる暴力から自分を守るための人権教育プログラムであること。こどもに知識や安心・自信・自由の権利を持っていて、こどもの権利を守るために、こども自身でできることのスキルを伝える内容である。つまり

こどもは、権利や力を持っているので、その力をエンパワーメントするのである。模擬ワークでは、こどもたちに行うワークショップをこども時代に戻ったつもりで、受けた。

参加者の感想として、

- ・CAPをはじめて知った。ワークショップをすることで、自分事として考えていけるんだと感じた。「ありがとう」とこどもに言える教師になりたいです。
- ・こどもが「チクる」と言われることを気にしている様子を見てきたので、「チクる」と「相談」の違いが分かりやすく明日から使えると思った。
- ・自分は「大切な権利の主体者である」という意識は、差別などの権利侵害にあらがうときにとても大事なことでと改めて思った。
- ・「そばに立っているだけで力になる」納得しました。
- ・「安心」「自信」「自由」という特別な権利をこどもたちに伝えようと思った。まず大人から理解しベースを作ることを学んだ。

7月28日（火）

第3回オープン講座

永松 謙一さん

28日同日の午後は、発達特性～感じ方の違い～というテーマで、博愛こども発達支援センターたくみのお城の永松謙一さんにお話ししていただいた。

永松さんは作業療法士でもあるので、こどもの姿勢保持のことなども分かりやすく話してくれた。

人間は最初から「感じ方が違う生き物」で、洋服の洗濯タグも気にならない人、触りたい人、など違いがあるし、気になるときは除去などの配慮をする。同様に物の見え方・聞こえ方もタイプで異なり、みんな違うのだとまず理解することの大切さを学んだ。

よく耳にする「ちゃんと座って」という声かけだが、「座って」ってけっこう大変であることを知った。こどものやる気スイッチを失わないようにしたい。

参加者の感想として、

- ・感じ方が違うというのは分かっているつもりだが、現実の学校の中では、対応がむずかしいことも多い。大分県も学校に作業療法士が早く入るようになれば良いと思う。
- ・「きちんとしなさい」と教職員は言うし、こどもも「きちんとしなければならない」と思い込まされて育っている。そんな中で、こどもたちの特性をどう見ていくのかと思った。こどもたちの背景に何があるのかを探っていく大切さに改めて気づかされた。
- ・私たちにも自分ではどうにもならないことがあるという言葉が印象に残った。

8月26日（水）

第4・5回オープン講座

木村 泰子さん・徳田 靖之さん

「人権を大切にしたい教育のあり方」について木村泰子さんと徳田靖之さんにリレー講演を午前中、午後には対談を企画した。

昨年度も実施したが、反響も大きくお二人のお話が人権を真ん中においた人のあり方であるということが今年も感じられた。

木村さんは、人権の本質、人権とはなにかを語られ、こどもの権利条約があるが、学校で守られていない権利を取り上げた。所持品服装の一律検査、体罰、辱め、生徒の声が届かない校則運用などがそれである。それらをなくし、こどもの権利が守られる空間に学校になるために、存在の肯定、安心とつながり、自己決定の尊重が大切であると続けた。そして校門をくぐってもこどもの権利条約は失われていませんかとも最後に問いかけた。

続いて徳田さんは、「教育の現場に求められること」として薬害エイズとの出会いで、感染した血友病患者は偏見差別にさらされて病院や保育者に来ないように言われるなどの事例と教育現場での取り組みを話した。次にハンセン病問題や優生保護法問題を話され、いかに人権が無視されてきたか、優生保護法の問題—社会に役に立つ人間になれるという教えの差別性—がすり込まれていることを話した。

最後に人間って素晴らしいことを結びに話を終わった。

午後は、対談形式で、質問用紙に書かれた内容に答える予定だったが、お二人の対談が続き、終了間際に会場参加者と意見交換をした。

参加者の感想として、

- ・自分の生き方を問い直される機会となった。
- ・我が子たちに「自律」できるようになってもらいたいと強く感じた。
- ・社会の役に立つ人間になれるという言葉は優生思想に繋がると言う言葉に衝撃を受けた。では学校ではどのように指導すべきか考えたい。
- ・これまで学校の対応で引っかかっていたのはほとんど優生思想に関わる内容だと気付かされた。学校で伝えたいと思う。
- ・自分はおごった教師ではないかと思直さないといけないと思った。
- ・ところが伝わる本物の講演会だった。
- ・無意識の偏見、同調圧力、優生思想など人を差別する様々な要因があること、それをしっかりと意識することで差別と対峙していきたいと思った。
- ・こどもの環境は関係ない、未来は変えられる。その思いを自分は持っていたらどうかと振り返る機会となった。



背筋を「ヒヤリ」とさせる

県人教専門委員

大学生活最後の年、私は火葬場と葬祭場が一体となった施設でインターンシップを経験した。

現場では、納棺から葬儀の準備、火葬、骨上げまで、職員の方々の傍らで学んだ。実際に遺体を焼く作業も見学させて頂いた。そこにあったのは、故人の尊厳を守り、遺族の思いに寄り添いながら、一つ一つの務めを果たす姿だった。その細やかな心配りと高い職業意識に、私は深い敬意を抱いた。私の居住地からは遠く離れていたが、もし可能なら自分の最後もここで送り出して貰えたらとさえ思ったのを覚えている。

充実したインターンシップを終え、疲れと満足感に浸りながら実家に帰る。玄関の扉を開けた私に母が掛けた第一声は「おかえり」ではなかった。

「あんた、まさか人を焼くような仕事に就くんやないやろうね？」

一瞬、何を言われたのか分からなかった。もともと、その仕事への就職を考えていたわけではない。それでも、私が現場の職員に抱いた敬意と、母の言葉ににじんだ職業への偏見。そのあまりの落差に、気持ちが追いつかなかった。

その後の口論の内容は、正確には覚えていない。腹立たしさや悲しさ、驚きが入り交じる中、現場で学んだことを懸命に伝えた。母は仕事の必要性には理解を示しながらも、「でも、貴方がその仕事をする必要はないでしょう？」と言った。

私は決して母を責めたい訳ではない。母は普段、他者への配慮を欠く人ではなく、地域でも信頼されてきた人である。そんな母でさえ、我が子のこととなると先のような発言をしてしまうのだ。だからこそ、私はこの出来事を忘れることが出来ない。

私自身、今は子を持つ親である。当時の母の言葉に同意はしないが、我が子を心配する気持ちは理解できる。我が子を危険や苦勞から遠ざけたいという思いが、よく知らない仕事や人を「避けるべきもの」と決めつけることにつながれば、その思いは誰かの尊厳を傷つけかねない。もしあのインターンシップでの経験が無く、将来自身が同じ状況になったらと想像すると背筋が「ヒヤリ」とする。

必要なのは、やはり「学び続けること」なのだと思う。差別はいけないと「知っている」だけでは、暮らしの中の具体的な場面で、自分の思い込みに気づけないことがある。事実に基づく知識を得ること。実際に人々の姿や声に触れること。そして、自分の中にある無意識の思い込みと向き合うこと。その積み重ねによって、初めて自分の見方を問い直すことができる。

人権教育・啓発の現場では、「差別を自分事として捉える」という言葉がよく使われる。私自身も繰り返し口にしてきた。しかし、使い慣れるほどに、言葉だけが先行し、本質がぼやけていないかと不安になる。そんなとき、私はあの日を思い出す。私にとって「自分事として捉える」とは、背筋を「正す」よりも「ヒヤリ」とさせることに近い。その「ヒヤリ」は、誰かを責めるためのものではない。自分の内側にも偏見の芽が潜んでいないか、立ち止まって問い直すための感覚だ。

私は今、社会教育課で人権講座の企画・運営に携わっている。人権に関心を持つだけでなく、これまで人権課題に触れる機会の少なかった人にもどうすれば届くのか。知識を伝えるだけでなく、日々の言葉の選択を振り返るきっかけをどうつくるのか。答えは簡単ではない。

それでも、少しでも多くの人々の背筋を「ヒヤリ」とさせたい。そして何より、私自身がその感覚を失わないようにしたい。その思いを胸に、これからも人権教育・啓発の仕事に向き合っていく。



標準服型制服の導入から見えてきたこと ～差別を見抜き、差別を許さない学校づくりのために～

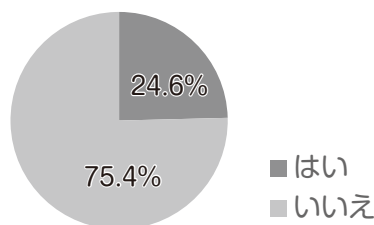
県人教専門委員 大分鶴崎高校 足立 正和

私が勤務する大分鶴崎高校は、従来からの男女生徒用制服（学ラン、セーラー服）に加え、今年度新たに標準服型制服（第三の制服）としてスーツ（ブレザー）タイプ（Ⅰ型とウエストがやや細身のⅡ型）の上着とスラックスのセットを導入した。その背景には、性の多様化を認める社会の変化とそれに伴う大分市内の中学校の男女兼用の標準服の導入がある。

私はこの本校の制服の変化を生徒が実際にどのように感じているのかを知りたいと思い、１年生にアンケートを実施した。今回は、回答をしてくれた学年の約半数の138名の回答結果をもとにした分析であり、回答時には性別の入力は求めている。今後、学校で制服について全体的な調査を行うことになっている。

質 問	回答項目	人数（人）	割合（％）
1. 第三の制服を着用していますか	はい	34	24.6
	いいえ	104	75.4
2. 1の「はい」の主な理由 (複数回答可)	デザインが好きだから	22	64.7
	気温などの気候に合わせやすいから	20	58.8
	動きやすいから	19	55.9
	より自分らしさが表現できるから	7	20.1
	価格が手頃だから	1	2.9
	その他	7	20.1
3. 1の「いいえ」の主な理由 (複数回答可)	伝統の制服だから	47	45.2
	デザインが好きだから	38	36.5
	入学前からあこがれていたから	31	29.8
	他の人や友人が購入するから	16	15.4
	動きやすいから	10	9.6
	気温などの気候に合わせやすいから	3	2.9
	価格が手頃だから	0	0.0
	その他	38	36.5

1. 第三の制服を着用していますか

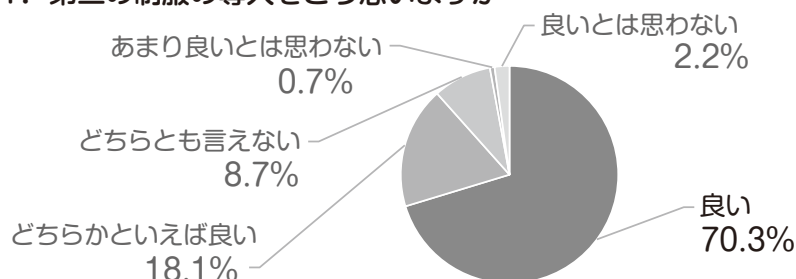


第三の制服の着用者数はほぼ4分の1で、着用の最大の理由は「デザイン性」（64.7％）であることが分かる。次いで「機能性」（約60％）が多く、「自己表現の手段」（20.1％）としての回答も見られる。「その他」（20.1％）は、「中学校で着ていたから」（5名）が最も多い。一方、着用していない最大の理由は「伝統の制服だから」（45.2％）で、以下「デザイン」（36.5％）「あこがれ」（29.8％）と続いている。「その他」（36.5％）は「第三の制服にスカートがなかったから」（12名）が最も多く、次いで「兄や姉、先輩のお下がり」（4名）、「保護者の考えで」（2名）となっている。

これらの回答からは、学校の意図した多様性への配慮よりも、制服の「見た目」や「機能性」、「学校の伝統文化」をより重視する傾向があることが分かる。

質 問	回答項目	人数（人）	割合（％）
4. 第三の制服の導入について、どう思いますか	良いと思う	97	70.3
	どちらかといえばよいと思う	25	18.1
	どちらとも言えない	12	8.7
	あまり良いとは思わない	1	0.7
	良いとは思わない	3	2.2
5. 学校の服装（制服・標準服）において、あなたはどのくらい「自分らしさ（自己表現）」を大切にしたいと思いますか。	とても大切にしたい	50	36.2
	ある程度大切にしたい	76	55.1
	あまり大切にしたいと思わない	5	3.6
	大切だとは思わない	7	5.1
6. 今の学校の制服やルールの中で、「性別による決まり」に違和感や窮屈さを感じたことがありますか。	よくある	1	0.7
	たまにある	8	5.8
	あまりない	79	57.2
	全くない	50	36.2

4. 第三の制服の導入をどう思いますか



4. 「第三の制服」の導入について肯定的な回答が約9割を占めている。最大の理由として着用／非着用に関わらず、一人ひとりの好みや事情に応じた選択の幅が広がった「選択肢の拡大」を挙げている。その他、通気性の良さなどの「快適性や機能性」、「自由度の高さや多様性への配慮」などについて好意的に捉えた声が多い。否定的な意見の中には、スカートの設定を求める複数の声や「他の高校と区別がしにくい」という回答もあった。

5. 「大切にしたい」が9割を超えており、既成のルール内での「自分らしさや自己表現」への欲求の高さを示している。

6. 全体的には「（あまり、全く）ない」が93.4%と非常に高いものの、「よくある」「たまにある」の理由として、「性別による差別を感じる」や「ズボンを履きたいが女子のズボンの着用率が低く、男性用制服として公開されているから履きづらい」、「第三制服にスカートがないから」という回答も見られた。また、「男子はスカートを選べないから」という回答もあり、校則では規定されていないものの「男子のスカート着用」の壁の高さを示す回答もあった。

【全体を通して】

もう一つ質問項目として「学校の服装、性への多様性への配慮について学校に伝えたい意見やアイデアがあれば自由に記入して下さい」という項目を設けたが、16人が一層の制服の改善や服装に関する校則の適用の見直しを求める声を挙げていた。中には「カタログや学校生活で『男子用・女子用』という呼び方や標記を避け、『タイプA・タイプB』のような表現にする。」という学校側の差別性を見抜き、指摘する意見もあった。

「こうだから」といった一方的な決めつけや固定的な見方・価値観によって、部落差別をはじめとする差別は生み出されてきた。今回のアンケート結果では大半が「問題なし」と回答しているが、普段の学校生活の中で「決めつけ」や「押しつけ」をしていないか振り返り、見落とされがちな少数の、しかし切実に生きづらさや違和感を訴える声を、私たちが学校全体または社会の課題として捉え、具体的な改善につなげていくことが今後も求められている。



こどものまなざし

このコーナーでは、人権作文集「ひかり」に掲載された作品を紹介していきます。子どもたちが日常生活の中で考えたこと、感じたことなどにふれ、子どもたちの姿から学んでいきたいと思います。

なかよしになってうれしいよ

ずこうのえに名まえをかくとき、Ｔちゃんの字が小さかった。それを見て、わたしは、Ｔちゃんに「字が小さいよ。」
っていった。そしたらＴちゃんが、
「ふんっ。」
っていった。わたしは、なんでＴちゃんがおこったかわからなかった。わたしは、なんだかいやな気持ちになって、おこってしまった。そしたら、Ｔちゃんとはなせなくなった。でも、先生に、「ちゃんとおもったことをことばでつたえてみて。」
っていわれた。わたしは、
「ふんっていわれたのがいやだった。」
っていった。Ｔちゃんは、
「名まえが小さいっていわれたことがいやだったんよ。」
っていつていた。それをきいてわたしはＴちゃんにあやまりたいとおもった。わたしが、
「ごめんね。」
というと、Ｔちゃんも
「ごめんね。」
といった。なんだか気持ちが悪かった。
なかよくなれてよかったな。おはなししたら、もやもやがどこかにとんでいくんだね。

人権作文集ひかり2026【第38集】

豊後大野市 小学校 一年 恵藤 遥さんの作品

自分の思っていることを面と向かって直接相手に伝えることは、時に勇気がいることです。この作品は、それ乗り越え、思いを伝えあうことで、温かさが生まれたことを伝えてくれています。

顔が見えないやり取りが多くなりました。しかし、思いを伝えあうためには、相手と直接話をするのが大切なのではないでしょうか。わかり合うための最初の一步は対話である、ということを示唆している作品だと感じました。

こちら 編集部

ヒューライツフォーラムに向けて、8月に事前学習会を行い、私自身とても学び多き会になりました。どの実践からも、明日からのやる気がみなぎる報告です。当日参加される方々とともに学びたい一心で、準備を進めております。10月23・24日に会場でお会いできるのを楽しみにしています！！
(こば)

【訂正のお願い】

各学校に配布している「ヒューライツフォーラム2026開催のご案内（最終案内）」に誤りがあります。今回のニュース・HPに載せているものが最新版になるので、正しくは本誌を参照ください。